

## グリーン・チャイルド考

笹本正樹

まえがき

ここでとりあげる「グリーン・チャイルド」は、H・リードの約八十冊の著作のなかにおける唯一の小説である。(1)彼には詩集、評論集などが多いが、そのなかにまぎれこんだかのように、この一冊の小説が入っているのである。この作品は、彼が四十二才のときに書いたものであり、彼の思想、世界観が確立し、しかもそれが象徴的に示されている貴重なものだといえる。これが小説として、象徴的意義の高いということでは、メルヴィルの「白鯨」とならぶものである、との評価もある。ともかく、英国での散文の珠寶と呼んでもさしつかえないものである。

H・リードは知識の海賊とでもいうような人物であって、彼の著作で彼の思想の骨格を明らかにしているようなものは、わりあい少いのである。しかし、この「グリーン・チャイルド」は、彼の思想を解明するための、

最も重要な鍵となる作品であることは、疑いのないところである。

はたして、リードはこの作品によって、真に何を語りたかったのか、それについてはいろいろな角度から推論できると思う。そのなかでも、とくにここでは人間形成といった点から考えていきたい。それ故、標題も「考」とさせてもらうことにした。

### 一 概 観

英国の北部の小さな寒村の小学校教師をしていたオリヴァー(のちにオリヴェロと改称する)は、彼の生徒のなかにいた乱暴者のニッシュにあいそをつかす。そして、教師をやめ、文筆の才能で身をたてたいと、ロンドンにでていく。

そこでは、彼を雇ってくれるような新聞社はなく、ついに洋服店につとめることになる。その店で三年のあい

だ貯金をし、その金をもとにワルシャワからスペインへと旅をする。ところが、スペインにいたとき、ジャコバン党員とまちがえられて、投獄される。その獄のなかで、南米の植民地に革命をおこそうとしている仲間と親しくなる。やがて恩赦ののち、彼は南米に渡ってゆく。

革命はみごとに成功し、独裁者を倒してのち、彼は最高評議会の政務長官となる。数年して、彼にこの共和国の大統領の位置につく運命がめぐってくる。

その後、生れつき詩人肌のオリヴェロは、この世の榮譽にもあきる。そこで、みずから爆弾を破裂させ、いかにも暗殺されたかのように装って、南米から脱出して、三十年ぶりに故郷にかえってくる。

故郷の片田舎にかえってきたオリヴェロは、むかし駅の方に流れていた川が、逆になっていて、かつての上流の方にむかって流れているのに気がついた。この不思議さを解くために、彼は川をさかのぼっていく。

夜になって、ふと怪しい家に近づくが、そこではかつての教え子ニーショウが、不思議な緑色の肌の少女を妻としてゐる。ニーショウは妻のサリー（グリーン・チャイルド）とうまくいっていない。その夜も、彼女を虐待している。

彼女を助けようとするオリヴェロとニーショウは、格闘となる。ニーショウはあやまって足をすべらし、彼の所有である製粉所の水源地におちて死んでしまう。

オリヴェロと緑の少女（グリーン・チャイルド）は溪谷のながれをたどって歩いていき、その川の終点である沼地にやってくる。そこで、ふたりは湖の水面のなかへと姿を没する。心中してしまふのである。

さて、水の底に沈み、地下に吸いこまれたふたりは、洞窟をくぐったのち、緑の国にやってくる。ここでは、第一の岩棚というところがあり、五十人ほどの男女がいて「青春の快楽」をむさぼっている。

そこから、第二の岩棚へいくと「手仕事の快楽」がおこなわれている。彼はここで結晶体づくりにはげむことになる。そして、五つの作品を賢者にみてもらって、合格する。そして、次の岩棚へとゆくことができるのである。

第三は「言論の快楽」をなす岩棚であって、彼は「秩序」ということについて語りあう。みどりの国の住人たちは、また彼等自身の独特の秩序感覚をもっている。

最後の岩棚、これは最高の岩棚である。ここにおいて「思索の快楽」をあじわうことになる。そして、欲望

をすててしまふことによつて、宇宙の一部として調和することに至るのである。

こうして、グリーン・チャイルドとオリヴェロは死んで、共に水槽のなかに収められる。

「二人のからだを浸している水、その面に漂う妖精の豊かな髪の毛は、オリヴェロの胸の上にひろがって、珊瑚状に密生している彼のあご髯と解きにくいまでに絡みあつてしまい、まるで石の網目細工のように見えた」

(25)

ついに、ふたりとも水晶体の化石となつて終るのであつた。

以上、のべてきたところを、ダンテの神曲と比較すれば、理想国家をつくるため革命的活動につくすのが、地獄篇Vとみなされよう。次に、彼の育つた故郷、そして帰国してさまざま田舎道の事件が、煉獄篇Vであると言えよう。最後のみどりの国は、いわば天国篇Vである。

また重要なことは、この小説は神秘的であり、東洋的な「寂滅」というか「涅槃」の境地にいたるフィナーレをもっているということである。詩人、リードは緑の妖精をもつてして、何を語りたかったのであろうか。現代人に何を訴えたかつたのだらうか。

## 二 伝説

英国の地方につたわる説話やおとぎ話をあつめたものに、トマス・キートリーによる「おとぎ神話」なるものがある。この本のなかに「緑の子供たち」という章がある。H・リードはこれにヒントをえて、彼の小説「グリーン・チャイルド」をつくつたようである。

キートリーのものは単なる噺話といつたものであるが、リードはこれを核としながら、スケールの大きい宇宙的な小説に仕立てたのであつた。

では、少し長くなるが、キートリーのその物語を、次に紹介しておくことにする。(2)

「サファックにあるウルフ・ビットの聖メアリ修道院で、一人の少年とその妹が村人たちによつて、そこにある穴の入口のちかくで見つけられました。ふたりはほかの人たちと同じ形の手足はしていました。ふたりの色が世間の人たちとは違っていました。というのは肌全体が緑色をしていたからです。かれらの話すことばは誰にもわかりませんでした。

ウィイクスのリチャード・ケイン卿という騎士の家に珍

しい者として連れて来られたとき、かれらはひどく泣きました。パンやその他のものが与えられましたが、かれらはどうしても手を触れることができませんでした。しかし、後でその少女が話したように、かれらはひどく空腹に苦しんでいました。最後に茎のついた切りたての豆を家に持ちこみましたところ、いかにも食べたそうにそれをくれという身振をしだしました。渡すと、かれらは豆が茎の中にもあると考えたのでしょうか、莢でなく莖をさきました。豆が入っていないのを見て、ふたたび泣き始めました。

そばにいた人がこれを見て、莢を開いて豆の実をみせてやりました。かれらはとても喜んで、これを食べ、ながいあいだほかの食物をとりませんでした。けれど少年の方はいつも元気がなく、ふさぎこんでいましたが、間もなく死んでしまいました。少女の方はずっと健康で、いろいろな種類の食物にも馴れ、すっかり緑色を失い、だんだん全身が血色のよい体質に戻りました。彼女はのちに洗礼を受けて生れ変わり、ずっとその騎士に仕えて日を送りましたが、(わたしがいれば騎士とその家族から聞いたのですが)その振舞いはどうもだらしなく気ままでした。よく彼女のもとの国の人々について尋ねられ

ましたが、彼女がいうのには、その住人も、また彼女がその国で持っていたものも、すべて緑色をしていたということですし、また、そこでは太陽は見られず、みるものとしては、日没後の薄明りのようなものだったとのことでした。前述した少年といっしょに、どうしてこの国にやってきたのかを尋ねますと、彼女は次のように答えました。ふたりが連れだって歩いていると、洞窟のところにやって来てしまいました。それに入ると快い鐘の音が聞こえてきたのです。その心地よい音にうっとりとして、ながいあいだ洞窟内をさまよっているうちに、つい入口にきてしまったのでした。そこからでたとき、ふたりは太陽の強烈な光と異常な気温のために気を失ってしまったので、ながいこと倒れていたのです。ふたりに近づいて来た人々のやかましい物音に驚いて、逃げ去ろうとしましたが、どうしても洞窟の入口が見つからず捕ってしまったのです。」

この実話にでてくるグリーン・チャイルドは北極に住むある種の人々であるようだし、洞窟のかなた地下の国々に住む人々のようでもある。あるいはそうした山野に捨てられていたふたごなのかも知れない。

この子供らは普通の人々とちがった食物をとっている

ことがわかるし、また言葉もちがっているようである。そして快い鐘の音にうっとりしているうちに、この世へ道をまちがえてきてしまったのである。

このままでは、つまらない噂話として捨てられても仕方のないものであるが、リードはこれを拾いあげて、みごとに芸術作品として化工することができたのである。それでは、リードの作品のなかでの「グリーン・チャイルド」はどのようなものになっているかを、彼の表現のなかから見ていくことにしよう。

### 三 緑の子供

リードの小説の第一章には、グリーン・チャイルドについての描写がよくでてくる。しかし、その実体はどうなのかというと、わたしたちにはよくわからない。もちろん、それが妖精めいた存在であるとすれば、あるいはわからないのが当然なのかも知れないが――。

では、それらの例をいくつか、挙げてみることにしたい。

「女の肌は白いどころではなく、まるでアヒルの卵のような薄緑色の明暗を帯びていた。そればかりか、その

皮膚は異常に透きとおっていてその下に、赤いでも青いでもない鮮やかな緑色や黄金色の、眼にしみるような静脈や動脈が枝模様になっているのが、その皮膚をとおしてみえた。指の爪はまるでつぐみの卵の殻のような薄青色だった。

彼女の肌からただよう仄かな香気は、どこかしらすみれの花の匂いに似て甘たろく、ちょっとくどい感じだった。」(3)

白すみれの花の匂いのする、薄緑色の肌をもった少女であることがわかる。しかし、それも状況に応じていろいろと変化をする。

「彼女の肌は、ローソクの灯を風からおおうとき、掌が透いて見えるあの肉のような、あるいは閉じた眼ぶたのうすい皮膜をとおして太陽をながめたときに見られる光芒のような、そうした感じであった。」(4)

ここでは肌が曇った感じである。場面が夜であるため、あまりいきいきとしていない。非常に敏感な肌のもちぬしとみられる。

「緑の肌の少女の歩き方は、まるで妖精のようだった。彼女は裸足を朝露に濡らしながら、絶えず顔を、太陽の方に向けて歩いた。」(5)

気分の良いときには、このように明るい歩みをもって  
いるのである。感情のうごきにしたがって、皮膚のいろ  
も変化するのが、次の描写でわかる。

「彼がみて驚いたのは、彼女の容貌がすっかり変って  
しまっていることだった。あの透きとおるように緑色だ  
った肌が、ちょうど熟しきったすももを思わせる、黄色  
い蠟のように濁った色艶になってしまっていた。眼のま  
わりは暗くかげり、もう呼吸がほとんど聞きとれないく  
らいなのだ。長い間、彼女はそこに横になっていた。そ  
して、その体いち面にふりかかる強い日光のなかで、か  
ろうじて気力を取り戻したかのようにだった。」（6）

グリーン・チャイルドは、感受性そのものであるよう  
に思われる。陽をあびて活気のあるときには緑色で、気  
分がめいってくと黄色くなるのである。

彼女の食物への関心は、また人間とはちがったえりご  
みをもっている。

「サリーは火に接近することが全然できないこと、そ  
して獣肉はなんであれ、頭から毛嫌いすること……彼女  
が好んで食べるのは、谷川でとれる姫鱒だったが、それ  
も常に、煮たきせずに食べるのだった。牛乳も少しはの  
んでいたが、榛の実とか、野いばらの実、オランダガラ

シなど、それに松茸、椎茸のたぐいは、どんなものでも  
むさぼるように食べるのであった。」（7）

こうした点からみると、彼女は魚と木の実をよくたべ  
ることがわかる。それでは、もともと緑の国では何をた  
べていたのであろうか。

「水気の少ない洞穴には、もつれあって枯れた草木の  
根のようなものが、天井から垂れさがって生えている：  
形状の植物が見られたが、これは根ではなく、ちょうど  
普通の鉛筆ぐらいの直径の太さをもった空ろな茎であっ  
て、節くれ立った子房にわかれ、その中には核が入って  
いた……グリーン・チャイルドはその一節をもぎとって薄  
く乾いた莢を割り、その中の核を取りだして、オリヴェ  
ロに食べてみるようにとすすめた。それは甘く口当りの  
よい味がした。」（8）

食糧は、洞窟に生えている茎のなかの実であることに  
なっている。その茎をわって、なかから種のようなもの  
をだして食べる。これが、緑の国の人々の常食、すなわ  
ちパンがわりである。

キートリーの話のなかでは、豆の茎をわってもなかに  
なにもないので、グリーン・チャイルドは泣いたという  
ところがあつた。茎のなかに粒根のようなものが入って

いて、そのコリフラワー状のものを実を主食としているようである。

さらに、グリーン・チャイルドが、一般の人間とちがっているところは、性欲があまりなく、ほとんど睡眠もとらないということである。これはH・リードの好みも入っているのだと思うが、次のようにそれを表現している。

「グリーン・チャイルドには、正常な性欲というものは無い。彼女はそうしたことに全く無知であった。：

彼女は水車小屋の早瀬の冷たい水が大好きで、しばしばなんの羞恥心もためらいもなく衣服を脱ぎすて、まるで人魚のようにその流れに裸身を浮かばせるが、そんなとき彼女の肌は水の要素にとけこんで、ほとんど見分けがつかなくなってしまうのだ。…彼女は普通の人間のように睡眠をとることをめったにしなかった。なん時間ものあいだ椅子にかけたまま、周囲のことをなにも意識せず、しかも両眼は見ひらいたままで、一種の催眠状態でいるらしいことがあった。夜分、寝床に横になっている間は、おそらく暗闇のなかで、彼女も眠っているだろうとは思われた。」(9)

食欲、性欲、睡眠欲といったものは、それほどあるよ

うには思われない。また、ことばもあまり覚えていないようである。ともかく感受性はするどい。感性的な、植物的な生きものであるようである。植物として生きるべきであったものが、まちがってこの世に人間となりあらわれたようにさえ思われる。

リードがどうして、このような「緑の子」に執着をもったか、そのことを考えてみなければなるまい。

その一つは、この妖精のような子、自体が汚れなき感性を示す何ものであるかということである。第二には、これが芸術家のもっている感受性といったものではないか、ということである。美はうつろいやすいものであり、太陽のひかりのなかに、ある一瞬あらわれたとみるや、次の瞬間には消えてゆくものである。また、芸術家の心理状態は、こうしたものに對して、するどい感性的認識をもって対応しなければならぬであろう。

「嬉しさを示すときには、皮膚の輝きを強め、両眼を縞瑪瑙の炎のようにきらめかせ、のどの奥の方で歌をうたうような声で、静かに笑いながら、それを表現するのだった。悲しみについては、愛情の場合とおなじく、彼女はそれがわからないようだった。しかしながら、恐怖と嫌悪の情を覚えると、日光を彼女から奪ったときに起

るように、彼女は蒼ざめた様相になるというか、漂白現象を示すのだ。それもゆっくりとはなく、刷毛で逆なでしたように、突然さつと蒼白くなるのだった。」(10)

喜びや恐怖については反応するが、悲しみについて反応しないというのは、何かを暗示しているように思われる。

わたしとしては、芸術のような表現欲は第一に恐怖によって、始まるのではないかと思う。古代には、呪文とか呪術というようなものがあつた。それがことばでなく、次第に物で表現されるようになったのではないか。そして、喜びはその恐怖心の去つたのものであるとみたらよいであろう。恐怖がおとずれ、そこに悲劇がおこつたときには、もちろん、そのあとは悲しみとなる。しかし、それはなるべく忘れてしまいたいと、彼らは願つたにちがいない。そのようなわけで、わたしとしては、グリーン・チャイルドは一種、原始的なところがあるのではないかと思うのである。すなわち原始的な美意識とでもいったものである。

もっとも、グリーン・チャイルド自体が、他国、別の世界からきたものである故に、この世のなかの人間の悲しみといったものは、もちあわせていなかったのかも知

れない。すなわち、人間の悲しみに反応しなかったのかも知れないとも考えられる。

ともかく、H・リードの「グリーン・チャイルド」についての具体的な描写といつたものは、こうしたものしかないのである。それ故、わたしたちは、緑の少女については、その背景となつていているところの、彼女のやつてきた「緑の国」について考慮しなければならなくなる。緑の国のような環境において、グリーン・チャイルドのような人間が生れついたらわけだからである。

#### 四 緑の国

オリヴェロとグリーン・チャイルドが訪れたところは、みどりの光のあふれる国である。

「あたりには水色の光りが満ちわたり、奥の方へかけては紺青の色が濃く、どうやら出口らしく思われる方では、淡い緑の光が漂っていた。緑色の苔におおわれた岩礁が突きでている岩の床が、この洞窟の底を一杯に陣取っているのだった。」(11)

グリーン・チャイルドは、オリヴェロを更に案内していく。



「そこは彼らがさきほど出てきた洞窟よりは、ずっと広いところではあったが、どんな大伽藍の内部よりも高く壮大な天井が頭上はるかに弧を描いておおっていたからである。そして、その空間をみたしている光りは、今までよりもさらに薄ぼんやりとしていて、まるでイギリスの夏の薄暮のような、いやあれよりもっと緑がかつた色合いが濃い感じだった。その光りは巨大な洞窟の壁から放射されるもので、なかに燐光の性質のものに違いないのがわかった。あたりの岩石がみな結晶形状をしていた。」(12)

こうした緑の国は、リードの小説では、どうやらある地方の地下にあるような感じである。しかし、そこで行われている生活は、われわれがむしろ天国と呼んでいるものと似かよった点があるようにも思われる。

そこではいろいろな快楽がおこなわれている。前にも述べたように、それは「青春の快楽」「仕事の快楽」「言論の快楽」そして、「思索の快楽」といったものである。こうした快楽をへてのち、大自然と調和する。すなわち「物」結晶体となる——死に至るといっているのである。

これはリードの世界観であると共に、彼の天国観でもあろう。彼の理想とする死にかた(裏がえせば生きかた)

だったと言えよう。次に、それを順を追って、ていねいにみていくことにする。

緑の国に入っていたオリヴェロとグリーン・チャイルドは、先ず審きの人の前にたつ。

「まもなく、洞窟の中から木琴に似た音調がゆっくりと鳴らされるのが聞こえた。オリヴェロとシレーンがふたたび審判者たちの前に進みでると、真中の人物がまた口をきいた。お前たちは一番低い岩棚へ下りて行き、そして、そこで青春の快楽にあきるまで留るがよい。その後、お前たちは別れて、他のものの組に加わり第二の岩棚に上り、そこで手仕事の快楽を味わうがよい。それからのは、オリヴェロはすでに第二の岩棚を飛びこえてもよい年令に達していることだから、更に上方の岩棚へ進ませよう。そこでは、お前は意見と言論の快楽を味わうことになるだろう。それから、最高の快楽、すなわちひとりの思索を享受しようになるまで、お前はその状態をながく続けるのだ。そして、最後には遠くはなれた洞窟に隠退するのがよからう。」(13)

これが審きの人のことばである。青春の快楽は二十代、手仕事の快楽は三十代、弁論の快楽は四十代、思索の快楽は五十代と考えてもよいのではなからうか。これは人

生のプロセス、生涯教育を象徴的に示しており、リードの人生観の寓喩的表現であるとも言えよう。

では、各々の岩棚をたどっていくことにしたい。

## 第一、青春の岩棚

この岩棚の状況は、われわれの身近な社会ではみあたらないものである。すなわち、そこにはいわゆる一夫一婦制による家族制度がないのである。女性妊娠すると、隔離されて子供を産む。子供は共通のものとして養育されるのである。

「この群集の中では、ほとんどの人たちが、いつでも、男女一対ずつに組みあっていた。ふたりは互いに腕を組んで歩いていたが、別に互いに熱愛し合っているふうでもないようだった。というのは、なにかしら理由があるらしく、時おりつがいが一応解けて一つのグループになると、今度はなんの文句も言わずに、他の相手と組み合っているのだった。つがいといっても、しっかり結びついているわけではなく、ふたりが広間へ下りて行って湯浴をしたり遊戯をしたりするときには、多くのつがいが入り乱れて混雑してしまい、再びそこを離れるときには、

前とは違ったつがいができているといったふうだった。ひとつのグループとして集まるときにも、別に誰かが指揮しているわけでもなく、彼らは大体五十人以内の人数を限度として集まっているようだった。」(14)

南米での革命のち大統領にまでなったオリヴェロが、こうして緑の国にさまよって遍歴してゆくさまは、木馬の計略をつかったあの英雄オデッシュユースが、ちょうどトロイ戦争のあとで、故郷イタカにゆきつくまで、さまざまに漂流していくのとどこか似たところがある。リードがグリーン・チャイルドをシレーン(サイレン)と呼んでいるところからもそうしたものを連想させる。

また、ダンテが地獄や煉獄をめぐってのち、ベアトリチェの案内で天国をめぐるのにもよく似たところがある。さらに、こうした男女の集団的交合の場、いわゆるフリーセックスを考えたのは、リードがプラトンを読んだ影響ともみられよう。すなわち「理想国」での、妻子共有、財産共有説からきているのであろう。

「彼女は……飽きてしまうまで快楽をむさぼり続けるのだが、どうやら子供を三人生んだ頃にはそうした飽和感が訪れるようだった。」(15)

こうして睡眠と交合の場で飽和感にいたると、次の第

二の岩棚にまわされるのである。

## 第二、手仕事の岩棚

ここの岩棚では、はじめに食糧あつめをさせられる。食糧係のあとでは、紡織係をさせられる。肌ざわりがまるで絹のようにさらりとした織物をつくる。

さらに銅鑼づくりと、結晶体づくりであるが、リードのもっとも述べたかったのは、この結晶体づくりなのではなかったのか、と思うほどこっている。実際、リードという人はある意味で結晶体づくりの名人だったともいえよう。

「しかしながら最高級の工匠といえ、それはなんといっても結晶体を磨く人たちだった。この目的のために、オパール、玉、螢石、褐鉄鉱など、いろいろな石を用いたけれども、その純度からいって水晶が一番貴重視されていた。われわれが結晶学と呼んでいる——結晶体の形状とか固有性、構造などを研究する——学問が、この地下世界のあらゆる学問の中でもっとも尊重されていて、事実これこそが学問そのものとみなされていた。なぜかというに、それが宇宙の構造に関するあらゆる観

念の基礎であるばかりでなく、美と真実と、運命の観念もまた同様にこの学問を土台にして成り立っていたからである。そうした問題は、最上階の岩棚にいる賢者や隠者のようにひとりひとり洞窟に閑居している人たちにとっての関心とされていた。……結晶体の構成には、等軸晶系、正方晶系、斜方晶系、単斜晶系、三斜晶系、六方晶系という六つの晶系が認められていて、それぞれの晶系を熱心に支持する人々がいるのだった。……工匠が完全な形態を創作しえたと思つた場合には、彼はまずその結晶を瞑想生活している賢者のところへ提出して、そのできばえの判定をしてもらうのである。もしも賢者がその観念の賜物を受理してくれたならば、その作品は完全だと判定されたことになる。工匠がそのような結晶を五つ受理してもらうことができたならば、そのときは、彼は賢者たる資格を認められたことになり、階段を上って最上階の岩棚に居住するようになるのだった。」(16)

リードは詩人として出発したのであるが、のちに「芸術の意味」「インダストリアル・デザイン」「モダン・アートの哲学」「アイコンとアイデア」などという著作をだしている。これらは、きわめて体系化されにくいものに言及して、結晶化を試みたものであると、言えるのでは

なかるうか。彼の才能は、未整理の領域をもとめては、それを明晰に体系化しようとするのであった。それはいわば結晶系とも言えるものである。

また、結晶体としてでてくるものに、等軸晶体、正方晶系、六方晶系などがあるが、これは序数的思考の作品をあらわしているのではなかるうか。単斜晶系、斜方晶系、三斜晶系というのは弁証法的思考の作品ではないかと、想像することもできる。

いずれにせよ、こうした結晶を五つ、工匠に受理してもらうことが賢者の資格であるといわれている。

### 第三、言論の岩棚

こうした結晶体づくりに適しないものは、死者の管理をするのであった。オリヴェロはその方面の仕事は一度もすることなく、言論の岩棚にまわされるのである。

ここでは甲虫を好むものと、蛇を愛するものとのにわけられる。普通、甲虫を愛好する賢者は蛇を好まず、また蛇を好む者は甲虫には手をださない、としている。

弁論の中心になるものは、宇宙の基本的原理についてであった。

「彼らは宇宙の性質についての彼らの基本理念から一切を抽出しているのだった。秩序に始めがあり、終りがあるとは想像できないとか、それが無秩序から創造されたり、無秩序へ還元されたりすることはありえない……とも言った。なぜなら、秩序ならざるものは、存在しえないからだ。……というのである。秩序は宇宙にあまねく連続し、ただ一種類しかない。秩序はいたるところにおいて同じものとしてあるが故に、それを分割することはできないし、また秩序を分割しうる何ものもありません。それは不変不動のもので、どこからみても同じ姿である。世界には中心はないが、この世界の内部でのすべての中心は秩序の中心なのである。思想というものも秩序以外の何ものでもない。」(17)

論議となるものは、このように秩序ということについてである。リードのなした仕事は(あるいはオリヴェロ)秩序をつけることであつた。体系のないものに、体系化、結晶化、秩序化をつけることであつた。それ故、彼の論じなしたことは、秩序というよりも、混乱しているものを秩序づけることであつた。

ここに、彼はロマンチズムの立場にあると共に、理性主義者でもある所以が生じてくるのである。彼は理性

論者であって、しかもたえず現実にロマンを抱いてたちむかうのである。

最後の岩棚までくると、彼のそうした理性的面がよくでていて、気分的なものや霊魂的なものを意識的に避けていることがわかる。

### 最高、思索の岩棚

欲望と霊性ということが、リードでは一致しているようである。それ故、わたしたちの東洋人とは少し見方が異なるのである。ともかく彼は次のように、この最終の岩棚で思索にふける。

「結局、われわれが生きているかぎりには、われわれの欲望は決して充足されないという結論への道をたどっているのではないか。なぜならば、魂は権力欲のゆえに、人間の限らない徒勞の源泉であり、人間が真の実存を探究しようとするのを邪魔する病患の原因ともなりがちだからだ……この現世においては、魂との交流または関係をできるだけ少くして、霊的交感を飽食することなく、神が喜んでわれわれを解放して下さる、その日まで自己の純粋さを失わないようにしているならば、そのときわ

れわれは完成の状態にいちばん接近しているのである。そしてそのようにして、精神の変動を駆逐してしまいうならば、われわれは純粋となり、宇宙の調和の一部分となるだろうが、この宇宙の調和とはまさに真理の法則ということに他ならないのだ」(18)

リードは霊性や霊魂をなるべく避けて、交流すること、関係することをできるだけ少くして生きるのがよいとしている。これはとりもなおさず、霊魂を悪とみているからではないだろうか。こうした考えは、天才にはいわゆる霊が宿るとか、精神を極限状況にまで追いつめると名人芸がでてくる、などといった考え方とは相反しているとみられるのである。

悪魔、欲望、霊魂、デーモン、そうしたものをとりのぞいた人間の状態が、完成の極点であるとしている。これは冷徹な悟入の境地なのかも知れない。こうした状態になることによって、宇宙と調和することができるのである。すなわち、物質にかえる。結晶体にかえるのである。それは「石の飾り格子」のようにみえる死でもある。死こそは、精神の動揺を避けるもの、心労をなくするものという、この考え方は、東洋の宗教の涅槃の境地に通ずるものをもっているといえるのではなからうか。死

にむかうリビドーがそこに作用しているとみられる。リードはやはり理性的な人間であり、彼の考え方は「緑」と関係があるようである。平和のための秩序ある理性とは、感覚的にそういった色彩をもっているのである。

## 五 創造の天才オリヴェロ

英国の一寒村から身をおこし、南米のある共和国の独立に活躍し、その大統領になったオリヴェロは、文筆で身をたてているリードとはまったく違った人間像である。

しかし、リード自身にはオリヴェロ的な要素が自己のなかに多分にあることを考えて、このような主人公を表現したのに相違ない。

実際のところオリヴェロという人物は行動の人といっ  
てしまふには、あまりに想像的な面をもっているのである。行動だけして満足する人ではなく、想像力があ  
るために、この想像したものを現実化するために行動を  
とるといったタイプなのである。

それでは、オリヴェロはグリーン・チャイルドと会  
うまえには、どのような経歴をもっていたのか。どうい

タイプの間であつたのか見てみることにする。

「三十年前に村を出奔した私は、まずロンドンへ向か  
って道をいそいだ。というのは、当時ロンドンでは世界の  
中心だったから、かずかずの驚異とさまざまな進路にみ  
ちたその大都会で、なにかしらわたしにふさわしい職を  
見つけられるだろうと考えたのだ。わたしは自分にある  
程度の才能があると信じていた。わたしは野心を抱いて  
いた。というのは、自分の持っている才能——文筆、思  
想の表現、言葉の駆使といった面での才能——を発揮さ  
せることによって、人々を動かすようになりたいと切望  
していたのだ。言葉はたとえ、内言にとぼしく、ときには  
はまったく意味がない場合でさえも、華やかに光り輝く  
ことができるし、人々の眼をひきつけ心を魅了すること  
ができるものなのだ。しかしながら自分の声を他人に傾  
聴させ、自己を群衆の上位にまで高め、自分の言葉に関  
心を集中させるために、いささかでも衆に抜きん出るこ  
とが、いかに至難なことであるかという点には、当時の  
わたしの考えは及んでいなかった。わたしは新聞社を次  
から次へと訪ねて歩いたが、わたしのために門戸を開い  
て糸口を与えてくれるところは、どこにも見出すことが  
できなかった。彼らに売込みうるものを、わたしはなに

一つもっていなかったのだ。かって、一行の文章も活字にしたこともなく、新聞の仕事に経験があるわけでもない、一介の年若い田舎教師だったのだから」(19)

オリヴェロは、文筆の才をもって身をたてたいと考えたのであって、実は行動の人ではなかったともいえる。少くとも行動だけにとどまるといった意味での行動人ではなかったようである。

そして、彼は国政に関係するようになってからも、歴史上の有名な政治家について、それらの人々は、実は芸術家ではなかったかという見方をする。

「芸術のみならず、政治においても、その原理は秩序の感覚なのであって、わたしは自分がイギリスから遁走してからこのかた抑圧されていた造形的な才能や野心の一切を、そうした自分の業務にうち込んでいるのを感じたのである。ソロンとか、シーザー、シャルルマーニュ、ナポレオンといったような偉大な行政家たちも、結局は自己表現を追求していた芸術家だったのではないか……とわたしは考え始めていた。行動を唯一の目的とし、遅い筋肉を自由に活動させる行動人と、秩序についての間ならか知的観念を目標において活動する行動人との間には、非常に大きな差異があることは確かだ。だが、た

とえば急流に押し流されつつ浮島から浮島へと跳び石づたいに跳び渡って、眼下の事態のみちびくままに行動せざるをえないといった、そうしたタイプの行動人もあるのだ」(20)

ここでリードは三種類の行動人のあることを示している。ひとつは「遅い筋肉を放恣に活動させる行動人」であり、第二は「秩序についてのなんらか知的な観念を目標において活動する行動人」である。第三の行動人は「時局をみて、それに対応して世渡りのうまい行動人である」といえよう。

わたしはリードが第一のタイプでないことはわかる。それ故、オリヴェロもこのタイプには入っていない。オリヴェロは第二の「秩序をめざす行動人」であったと思う。第一が破壊的行動人であるとすれば、第二は創造的行動人なのである。そして、第三は才氣的行動人であるといえよう。

そして、創造的行動人は、実は想像的タイプでもあるのである。

「すでにわたしはさまざまな経験によって、行動型の人と想像力の豊かな人とは根本的に相違があるという事実を認めてはいたけれども、それだからといって、勇気

というものが、行動型の人だけのものであるはずはないと考えていた。むしろ肉体的に強いタイプの人間が、極端に危険な状況にたち至ると文句なしに縮み上ったりする、いわば臆病者である場合が多く、逆に肉体が虚弱で想像力ある人物が、その想像力による変身能力のおかげで、より立派に決定的行動に入りうるものだ、というふう

うにわたしは考えていたし、その見解その後の年ごとの経験によってもますます確認されることになった。勇氣とは、死をばあたかも幻想にすぎないかのように考えて行動しうる能力……ということである」(21)

勇氣というと、それが行動型の人の本質的なもののように思うけれども、実は想像型の人にもあるのだと、彼はのべている。想像型の人は、あらゆる場合を予測するので、不意に驚くことはないというのである。そして決定的行動をとることも、この想像型の方が多くと見ているのである。

それ故、オリヴェロは秩序をめざす行動人であり、想像的人間で、創造的な人間なのだといふことができる。しかも、普通人以上にエネルギーなのである。

「わたしが公共のものとしてやった仕事は、かなり長い年月にわたり、相当に知恵や考慮を払わしたけれども、

決してそんな英雄的な価値あるものとして評価を受けなかった。……感謝や尊敬をこめて人々に受け入れられたけれども、歓呼の声によって迎えられたことは決してなかった。これらの仕事がなし遂げられたのは、絶えず休むことなく、次から次へと仕事を追い求めるわたしの氣力の、一種異様なエネルギーによるものだった」(22)

オリヴェロが、行動人ではあるけれども、単にエネルギーを暴発させるタイプの行動人でもなく、状況を洞察はするけれども、そこで器用に身を処するタイプでもない。

やはり、文筆の才とか、教師であった人間であり、想像的人間であって、それがたまたまエネルギーであるために、想像されたもの、すなわち「理想」をつくって、その現実化をはかるといった類型の人なのである。

それ故、こうしたタイプは、政治家や、軍人といった行動人であるよりは、芸術家、文学者的な行動人なのであるといえよう。それが新しい国、ロンカドールをつくることに役立っていたのである。

外国を攻めることや、国を治めることに彼はあまり執心していない。ともかく、独裁的な君主を倒してのちに、



新しい共和国をつくる。その企画に参加するということだが、彼の創造的な力を刺戟することになったと言えるのである。独立国にするために活躍した、その当時は政務長官という役割をしている。そして、国づくりのための原案をオリヴェロはつくったりしているのである。

こういうタイプの人が大統領になっても、国が治って安泰になると、想像力をはたらかせる余地がなくなってしまうのである。彼は権力を後継者にゆずるために、誰かに暗殺されたかのように装って、ロンカドール国より脱出してしまったのである。

こうした過程からみると、オリヴェロは大統領という仕事にはむかないで、また公害の故郷にも裏ざられた人間であるということがわかる。そして、彼にいちばんむいていたのは、あの緑の国で水晶系の結晶をつくる仕事だったのではないかということである。

水晶系の仕事にみちびいてくれたのは、とりもなおさず緑の妖精なのである。それは芸術の妖精のようなものではないのだろうか。

いわば、仕事という仕事すべて芸術的なものであり、このものがみだされることによって仕事は快楽となるのであり、快楽のうちに死んでゆくという、ほかならぬH

・リードの世界観、処生観といったものがここにかがわれるのではないかと思う。グリーン・チャイルドとは「美的感受性」のことであろうか。

## 結 語

このグリーン・チャイルドについては、いろいろの見方がある。次にそれらを列挙してみることにする。

- 一、リードが提唱する散文理論を身をもって実践し、散文の範を垂れようとしたものである。
- 二、英国においては、あまり花々しく開花しなかったロマンスの再興を念じて書かれたものである。
- 三、小説であると同時に寓話ないしはたとえ話として受けとるべきである。
- 四、散文形式をとっているが、本質的には詩的な業績として読まなければならない。
- 五、リード哲学をいわば象徴主義の筆で描出した自画像である。
- 六、彼自身のなかにある榮譽への意志をえがきだそうとしたのが、この作品の意図でもあった。

一から五までの批評についてはそれほどかわっていない

いが、グレアム・グリーンの評である最後のものは、リードの精神的姿勢の一面をよくついていると思われる。リードを動かしている多面的活動はセンス・オブ・グロリー (sense of glory) であるところなのである。

「陰鬱な未来に果てしない光芒を投げかけその光の中で白馬にまたがる白銀の騎士のごとくに、わたし自身と思われる人物が今やドンキホーテ的な戦いへと馬を駆り、目も眩むばかりの榮譽を達成するさまを見る」(23)

これはリードの若き日の心理の深層にやどっていた、ひとつの自己の未来像であったといえる。人間には、漠然としてではあるが、自己のゆくべき使命のようなものが、ほのみえるものである。それは単なる幻想のこともあるし、本能的予感としてびったりあたるときもある。この榮譽にむかう白銀の騎士は、まことにリードの若き日の夢、心理状態をよく示したものであろう。

グレアム・グリーンは、この物語を榮譽への意志について書かれたものとみている。(24) 実際のところ、オリヴェロが榮譽をえた人であることは事実である。しかし、彼は大統領になることには憧れていなかったのである。ただグリーン流に考えると、「緑の子供」は榮譽を

えたものにつく妖精ということになるであろう。そして「緑の国」は榮譽をえたもののゆく国ということになる。しかし、わたしはあえてこれに反論する。グリーン・チャイルドはあくまで、芸術の妖精なのである。感性的創造性を発揮する人にまといつく妖精だと思われる。

オリヴェロは権力という榮譽をえた。そのときには妖精はいない。しかし、権力を捨ておのれの故郷にかえることによって、この妖精サリーと出会うことになるのである。これは権力の榮譽ではなくて、感性的創造性にまといつく榮譽であろう。

榮譽というよりは、芸術的仕事、働き、活動、それ自体にまといついている無垢の感受性、感覚性、感官性、官能性といったものが、グリーン・チャイルドであろう。緑の国においては、異性ととの交際、結晶づくり、弁論、思索などと岩棚をめぐるのであるが、これらのそれぞれに感覚性、秩序性、創造性、思考性の美があつて、グリーン・チャイルドと切り離せないものである。それ故、グリーン・チャイルドとは美意識、あるいは美的感受性であると、わたしは結論する。

リードの思想を表現したといわれる、このすぐれた小説は、もちろん、彼の他の著作にいろいろと共通したも

のをもっている。リードはそれをいわゆる哲学者、教育哲学者のように概念的に示したくなかったのである。いわば論理として示したくないので、メタホリカルに示したところが、彼が詩人であり芸術教育の思索家であった所以である。

現代の教育をみるに、このグリーン・チャイルドは、わが国の多くの子供たちから失われてゆく危機にある。いや社会機構、教育機構それ自体がグリーン・チャイルドを否定することに誇りをもっているようである。

しかし、権力の座にあるときのオリヴェロに妖精があらわれなかったように、権力支配の環境とは美的感受性というグリーン・チャイルドは縁のないものである。教育の世界にこの権力的なるもの入ってくるときには、すぐれた人材をも、グリーン・チャイルドをも死に至らしめるのである。そこには文化の死、教育の終りがまっている。

「二人の体を浸している水の面に漂うシレーンの豊かな髪は、オリヴェロの胸の上にひろがって、珊瑚状に密生した彼のあご髻と解きにくいまでに絡みあってしまい、まるで石の網目細工のように見えた」(25)

権力を否定する人間こそ美的感受性がくもりなく発揮

できることを、リードはこの小説の最後でみごとに暗示したのであった。

注

- (1) Hebert Read: The Green Child. 1935
- (2) H. Read: English Prose Style. 1952
- (3) p.127(Thomas Keightly: The Fairy Mythology.)
- (4) H. Read: The Green Child. p.25
- (5) *ibid.* p.37
- (6) *ibid.* p.54
- (7) *ibid.* p.42
- (8) *ibid.* p.38
- (9) *ibid.* p.161
- (10) *ibid.* p.p.39 ~ 40
- (11) *ibid.* p.44
- (12) *ibid.* p.158
- (13) *ibid.* p.159
- (14) *ibid.* p.p.169 ~ 170
- (15) *ibid.* p.170
- (16) *ibid.* p.171

- ( 16 )    *ibid.* p.p.174 ~ 176
  - ( 17 )    *ibid.* p.181
  - ( 18 )    *ibid.* p.p.193 ~ 194
  - ( 19 )    *ibid.* p.60
  - ( 20 )    *ibid.* p.118
  - ( 21 )    *ibid.* p.p.140 ~ 141
  - ( 22 )    *ibid.* p.147
  - ( 23 )    *ibid.* Introduction
  - ( 24 )    *ibid.* Introduction
  - ( 25 )    *ibid.* p.195
- 付記    グリーン・チャイルドは現世にあっては Sally  
と呼ばれ、線の間におくつて Siloën と呼ばれて  
さる。